



# Mojo West Chronicle

～京都ミュージックシーンの系譜～

<http://www.m21.or.jp/clubfame/mojoproject/>

## phase 30 KYOTO MOJO ②

バンドから出てくる音というのは、そのバンドの人格で、バンドマンの心

同店の代表、大仁田氏は、自分が最も音楽に熱を入れていた若い頃のスタンスを押しつければと思わないと言った。「ギターを持つだけで立派な不良。音を鳴らしてもうるさいと思われただけ」という時代と今は違うのだから、それよりも『人間と音楽』というポリシー。つまり『人間がやる音楽であって欲しい』というだけです。概念的で、含蓄に溢れた言葉である。具体的には、それはどういふことなのか？「出てくる音というのはそのバンドの人格で、バンドマンの心として出てくる。だから病んで欲しくないということ。大衆音楽が自分自身は好きなんです。音楽を聴くのはミュージシャンじゃない。譜面も読めない『聴く人』です。その人たちに通じないような自己満足の音楽は、僕個人としては好まない。寂しい時の癒しとか、弱っている時のパワーとか、そういうエネルギーを伝えることができたらいいな、と。それは例えば、演者のテクニクとシンクロナイzedに特化したプロクレスシヴ・ロックであっても良い。『音楽的に面白い』ですから、全く嫌いじゃない。ジャンルでもって好き嫌いはないです。演歌も歌謡曲も浪曲も、『ハンバーグが好き』『カレーが好き』という食べ物の好みがあるように、音楽も趣味嗜好ですから。これはもともと大きく捉えて、人間と置き換えても構わない、ハンバーグもカレーも料理なら、白色人種も黄色人種も人間だ。やはりテーマは人間が組み込んだものであり、バンドという個性の集合体＝人格によるのだ。思考を一周させるとよく解る。

歳を重ねれば味覚も変わる。同じように視覚も聴覚も変わる。だがこうも考えられる。『GRASS』のジョン・ライオンが『ロックは死んだ』という言葉が本当なら、もう新種は生まれなにかもしれない。だからといって、聴いていて面白くないかと言えば、そうとは言い切れない。Kenji Yamamotoもそう言っていた。

「おはようございます」から始まる一日  
そして「これから」のバンドが安心して暮る

では今の状況に愛はないのだろうか？当コーナーで何度も、そして色々な方にぶつけてきた意地の悪い質問だ。苦言・進言・提言の類はないのか？「ありますよ。それはバンドにもガンガン言う。例えば、まずリハーサルに入ってくる時の、人間としての在り方のなさを感ずることがあります。今日一日、バンドも音響もホールも、お互い共有するわけですから、そこで『おはようございます』から始まること。少なくともウチのスタッフには必ず言わせてます。これは事実である。前号の同コーナー冒頭にも書いたとおり、実に気持ちの良い対応をしてくれる。『これはねえ、昔ね、私がイヤやったのが、昔のライヴハウスの人というのは、ハコに入ったらとにかく、えっらそうにしてたんですよ(笑)。そうすると誰もが『うせんとアカンのかなあ』という気になるでしょ。それが『ライヴハウスたるもの』という決めごとか？と(笑)。その文化がどこから来たかは解らないけど、バンドとして『何もかも初めて』という子もいるわけでしょう？。確かに、『モニターって何ですか？』というゲースも大いにあり得る。そこでプレッシャーを与えることは、きつと大仁田氏



にとつては、白いキャンバスにいきなり黒をブチ撒けるようなことなのだろう。「とにかく俺そつなヤツがいっぱいいたから、ムカついているところがあった(笑)。今はこのライブハウスでもそつまでのことではないでしょうけど、もうちょっとバンドさんに親切でありたいなと思っんです」。バンドが解らないまま、例えば「モニターの返しもう少し欲しかった」と言えないままにしたいくない。次に繋がないし、何より可愛相だ。「威圧して、テンパらしちゃうだけで(笑)、リハーサルからテンション下げちゃねえ?」とにかく、言葉だけじゃなく、空気でもへビに睨まれたカエルみたいなことにはしないように、と言っています。その威圧にも対向してこい、という根性論だけで上手く回る世の中でも時代でもない。だから聞かれる前に「モニターの返し、行ってます」と問い掛けてあげたい。だから店の側から挨拶をする。それなのに、「バンドの挨拶のいかに無いことか」と、よく耳にする。ライブハウスを利用する側は反省すべき点であるうし、同店のアプローチが、繰り返すが自ら言葉投げかける、ということなのだ。

大仁田氏は続ける。「僕らがいわゆる第二次ベビーブームの世代で、僕たちがもう大人じゃないんですよ、既に。だから子供を怒ることができないし、寝ることもできない。昔は自分のことはさておいても、子供を大事にした。だから殴れたんです。私でもよほどつかれましたから。でも私らはもう戦後生まれで恵まれた時代に育ってますから、だから大人にも親にもなれていないんですよ。それが子供を育てるから、どんどん劣化する一途なんだと思います。どこかで直さなイカンのやるけど(笑)」。思わずインタビューが止まってしまった。ここまで自戒を込めて言える人がいるとは。しかもこの世代で。自らが育つた頃に足りなかったものがなく、逆に、足りすぎていたから変化を求めたのだと。食べ物もある。だから余裕もある。そして刺激的なものも求めた。無いものを求めた先に刺激があったのではない、と、公認言えば、エネルギーが余ってたんでしょね。戦争があったり、食うに困っていたらそつちにエネルギーは行きまますから。学校もあるし、食べたいものも食べれる。テレビもある。もちろん今ほどの至れり尽くせりではないけれどね。でも今を知らない当時の僕らにすればね。足りないから求める。抑えられるから反発する。それが当たり前だと思っていたが、改めて同逆を突きつけられると、思い付くこともある。「足りない」ことに慣れて、「足りないフリ」を気取っていたのかも知れない。ポーズとしてのハングリー。だからロックは死んでしまったのではない。

## ライブハウスは怖い場所じゃない そつ言える存在が大切であること

自店をあまり「京都」という枠組みで考えたくもないという。「日本の音楽」として、日本の若い世代が生むものが、日本以外で通用する日が来れば良いと思う。それでも、地域的な特徴というものはある。それはライブハウスの側がどう思おうとも、勝手についてくる。これも人間と同じで、環境が違えば特性は生まれてくる。

それにしても、つまるところは各店の接し方であり、一軒一軒のスタンスを知るしかない。ブックイングマネージャーの中西氏が続けてくれた。「スタッフの多さも、大仁田としては活気に繋がるものと思っっているかも知れませんが、その『スタッフの数やハキハキした対応』とおつしやつて下さっていることが、評

価されているのかもしれない。実際、ツアーのバンドが「こんなハキハキしたスタッフか、しつかり細かいところまで仕事をされるのはすく気持が良いです。また来たい」と評することもあるという。「悪く言えば、『スタッフばかり多い』ということでもあるんですが(笑)」。そのあたりはまあ、やっかみ半分と言ったところだろう。もしくは、昔ながらのシカツメらしいライブハウスの雰囲気を楽しんでいるか、どっちかだ。「ライブハウスって『汚くて狭くてタバコ臭くて』がある場所ですよ(笑)。むしろそれがロックっぽいみたいだなね。そういうのが好きな方もいらっしゃると思っんですが、僕たちは掃除をキツチリして、クリーンなイメージで(笑)。だが、例えば「どうすればライブハウスに出れるのか?」という人にとっては、意外と今の時代、その方が合っているかもしれないとも。「高校生なんかだと、ライブハウス怖い、という純粋さもあるでしょう」。

## まだまだ発展途上、でも手応え充分 未来の笑顔を想像できるのだから

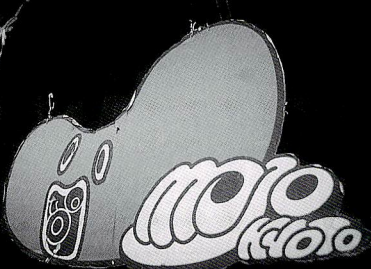
人を育てること。「育てる」といふ言い方が横柄であれば、「手伝う」といふ言い方でも良い。その方法にはふたつある。上へ上へと伸ばす手伝いをしようとするならば、「引」張り上げるか、持ち上げるかである。釣り針や荒縄を垂らし「掛かるヤツだけ、握り続けるヤツだけついてこい」と言っつか、二切合切、力の限り抱えてすくいあげて、持ち上げてあげる」と言っつか。当然、同店は後者。それはまだ新しい歴史がそうさせるというのもあるかもしれないが、



立派な性格だと感じられる。「拾得や磯礫で30年ですもんねえ...。ウチはまだまだ6年ですもんねえ」と大仁田氏は感慨深げに言うのだが、それでも大御所ライブハウスの1/5である。100歳と20歳では余裕も違おうが、成人はしていることになる。他のライブハウスのようなビッグネームではなくとも、徐々にメジャーなバンドとも懸念になりつつある。

惜越ながら、「MOJO」で見せていただいた20年前のライブリストを引き合いに出して、ひとつ提案をした次第である。「レベッカ」や「パーソンズ」「パービーボイズ」「ボウイ」などなど、全盛期を考えれば信じられない動員数のスコアが、あのライブハウスには残っていた。だから同店でも、今の瞬間に出演しているバンドのリストは残しておいて下さい、と、いつかきつと「アンボマスター」が来た日も思い出さるう。あのバンド、「コピー」対決してたんや」と「こんな動員数やつたんや」と笑って言える日が来るだろう。バンドはバンドで、きつと「最初来たとき目を疑いましたよ。スタッフが優しいんだもん」と笑っているだろうから。

もしもその時、ライブハウスのスタンダードが今と違ったものだと今でも、今でも「古き良き」の硬派なスタイルが、時代が一回転して主流になっていたとしても、スタッフには、笑って挨拶をして欲しいと思うのだ。バンドが偉そうなヤツになっていても、いつまでも優しく、親切に。そつあって欲しいと、切に願うのだ。



**KYOTO MOJO**  
京都市下京区四条通新町東入月鉦町39-1  
四条島丸大西ビルB1F  
075・254・7707  
営業時間はライブにより不定。要問い合わせ  
<http://www.kyoto-mojo.com>

'05 11.3 アメリカ西部コロラド州のデンバー市で、一般市民による大麻の少量所持を合法化する市条例が住民投票で承認される。条例によると、21歳以上の成人による28グラム未満の大麻所持は刑法上罪を問われない。  
'05 11.12 ポール・マッカートニーが、国際宇宙ステーション (ISS) に滞在する乗組員向け、史上初のライブ演奏。乗組員の目覚まし用の音楽として、米カリフォルニア州でコンサートを生中継。